「街」を綺麗に
清掃事業はじまる

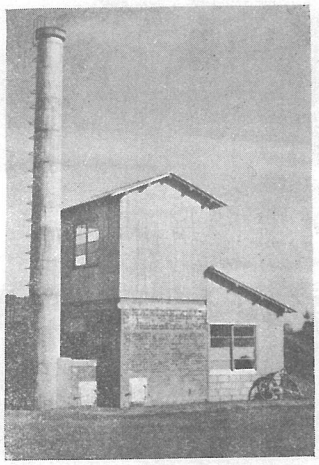
懸案であったごみ、し尿の処理も「議会だより」の項でお知らせしましたように、手数料も決りましたので、いよいよ、一月から業者に委託して行われることになりました。

塵芥焼却炉も昨年の十二月十三日火入れを行い、本格的な運営を始めております。

今のところ、集める地域は、上町、本町、東町と古川、栗山の一部に限られておりますが、将来は必要に応じて、町全域に及ぼされる予定であります。

なお、手数料について申上げますと、ごみの手数料は、ごみ箱の大小により月額、大が二〇〇円、中が一五〇円、小が一〇〇円で、翌月末までに収入役室へ納めて頂くことになります。し尿の方は十八リットル（約一斗）二〇円の割合になりますが、これは各家庭で、「くみ取券」を購入しておいて頂き、その都度くみ取券で業者に支払って頂きます。くみ取券は役場の収入役室の窓口で扱っており、券の種類も五円、十円、五十円、百円の四種類に分れておりますので、皆様の家庭の必要量に応じて適宜購入して頂くことになります。

兎に角、これらの事業は、町としても着手早々であり、色々な面で行届かぬ点が、多々あると存じますが、皆様方の御意見を参考にして、円滑な運営をしてまいりたいと思います。


煙を上げはじめた塵芥焼却炉

Hの日記から

十二月に入ると、めっきり寒さも加わって、ひとしお、冬の深さを想わせる。

その日は、厚い雲がいっぱいに拡がっていて、まだ午さがりだというのに黄昏どきのような錯覚を起させるのだった。

住み古した土間の真んなかに石油罐で造ったかまどがあって、人気もないのにパチパチと音をたてながら勢いよく燃え盛っていた。

黄昏を想わせたのは、かまどの火が、ほの暗い土間の辺りを浮きあがらせているせいかもしれない。

冷えきった体を持て余しながら通りかかったHは、火に憑かれたもののように自転車から飛び降ると「こんにちは」と、声をかけた。

そう云っておけば、もう当然の権利でもあるかのようにカズカオカと、土間に入り込んで火のそばに寄った。

手をかざしながら「お寒い、寒い」と、一人言をいいながら耳をすますと、奥の方に人の気配がした。

「暖らして貰ってますよ」と、奥の方に断わって、「火の番をしてるんですよ！……家宅侵入罪だなんて、いわないで下さいよ！」と、大きな声でつけ加えた。

しばらくして、五十がらみのその家の主婦が財布を手にして現われると、「きょうは随分冷えますね」と、始めて口をきいた。

訪れた声の主が徴税吏員の「H」だということを知っていたのだ。

「ほんとに滞めてしまってすいません」

「すいませんけど、きょうは、これだけにしといて貰いたいですけど」と、つぶやくように云った。

「やあ待って下さいよ……きょうは税金のことで寄ったんじゃ、ないんですから……」

「前を通ったらね、あんまりよく燃えてるもんだからフラフラッと、入り込んじまったんですよ」

Hは、律儀者の主婦の心中をおしはかって、言訳がましく云った。

火の魅力に負けて、つい寄りこんでしまったうかつさが、真面目な主婦を苦しめているのに気付いて後悔した。

そして、何んとかして話題をかえようと努めたが、適当なものが浮ばないで迷った。

「ああ暖ったかい」

「父ちゃんの具合は何う？……商売に行ったの？」

「寒いから、あんまり無理させないほうがいいですよ」と、矢継ぎばやに話しかけた。主婦は、板の間にキチンと座っていた。

「仕事ってわけじゃないんだけど、近所の葬式の手伝にいったんですよ」

「ほウ……何処です？……」

葬式は……」

「五兵衛どんのお爺いさんですけどね、永いこと寝ては居たんだけど、やっぱりね、……もう歳だから……」

「そう！　何処の家でもいうことばかりはないね？」

「さア……どうもありがとう、すっかり暖くなった。やっぱり火はいいなア」と、漸く区切りの言葉を見つけて立ちかけると、

「すんませんが、今日は二百円だけにしといてくれませんか？　ぼつぼつ入れますから」と、云った。

Hは戸惑った。

夫婦が揃いもそろって丈夫でもないのに、まだ小学生の二人の子供を抱えた「歩合とり」の行商でありながら、やれるだけやって見ますからと保護申請を辞退したということを聞いていた。

いま、主婦の手にある財布の中は残り少いようだった。

Hは云った。

「まアまア、無理しなくてもいいですよ、ウンと儲かったら、その時は思いっきり納て貰いましょうよ」と、冗談にまぎらわした。すると、

主婦は、

「父ちゃんが、三、四百円は貰って来るでしょうから大丈夫ですよ」と、二ツの百円玉を板間に並べた。

Hは、眼頭が熱くなって困った。ちょっとの間、ためらったが、「そうですか？……これは全く尊いお金ですよ、決して無駄には使わせませんから」と、自分にも云い聞かせるように語気を強めて云うと、入念に領収書を書いた。

Hは、重いペタルを踏みながら自己批判をするのだった。

この二百円を受けとって来たことは、果して許されることなのだろうか？　法の建前は別として、人情の上からは何うなのだろうか？　と、自分のした行為の是非を決めかねるのだった。

そうだ！　あした、直ぐにでも保護申請の口添えをすることにしよう。その結果によって、自分のしたことの可否が判然とするわけだ。

どうかして、自分の行為が「否」であったと決まるようにと願わずにはいられなかった。

きっと、認可になる筈だ。

そうでなければ、ならない筈だ。

Hは、もう自分で決めてしまった。

そして、漸く、さっきからの遣り切れない気持から救われることができた。

親ごころ

もう未練がましく言うのは止めよう、それより未納分を納めて後の免除申請の手続きをしようよ……」静かではあるが厳しい声である。女房にしてみれば、これからの、いや只今の家庭の事を考えると月額二千円の障害年金は喉から手の出る様な思いになるのも無理はない事であった。

野良に行く途中、突然牛があばれ出して牛車に掛けられて入院……治療……手術……右脚切断……そして生れもかぬ身体障害者となってしまったのである。

確か負傷する一ケ月前、国民年金指導委員が未納保険料のことで来てくれたそして、「国民年金は六五歳になったら貰う老令年金だけでなく、母子年金、障害年金等の年金が約束されているが事故の起きた時に納期前の未納がある用紙に印を捺してもらおうと思ってね」「障害年金？だって俺達は未なことを言うのは悪いとは思うのよ、でもねえ……いま一度役場へ行って頼んで見ましょうか……」

「頼んだって駄目なことは駄目なんだよ、あの時言っていたろう「事故の起きた時に納付指定日以前の未納があると年金がもらいなくなる」って、

「うるせえ！えんきでもない……」と無下に断ってしまった夫が恨めしいのである。

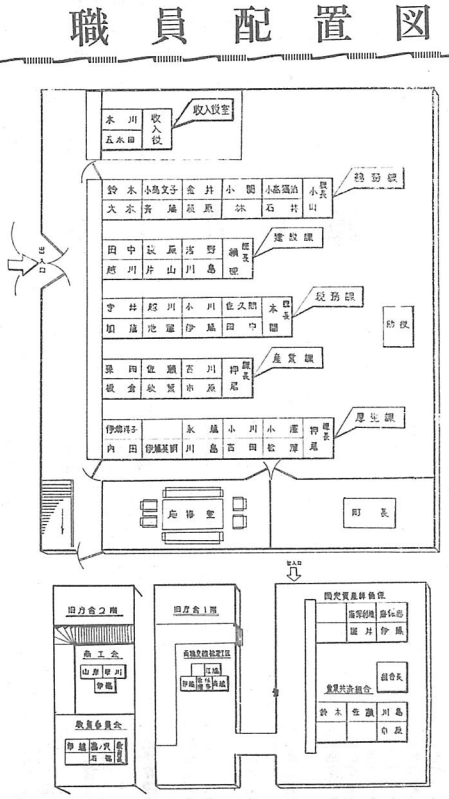
「俺だって何もこんなことになるとは思わなかったんだ」

まだ切断して間もない為かすでに縁の無くなった筈の指先の痛みを感ずるような右脚をさすりながらも、

……あの時納めておけば……という悔恨は亭主の心の何処かには在った。

「それは分っているわよ、艦の出る様な思いになるのも無

職員配置図



昨年一月号で職員の配置図をお送りしましたが、その後、職員にも異動があり、組織も一部変更になりましたので、町民の皆様の御参考までに職員の配置図を掲載いたします。

全家庭に有線を

先日、家を留守にして近所の店で買物をしていたら、有線の交換所が、しきりに私の家の番号を呼んでおります。私はその店の有線を借りて相手と話をして用件を足したが、普通の電話であれば、これができないわけです。有線放送には、たしかに秘密な話のできない不便さはありますが、こんな場合になると電話より便利な点があります。また、役場や農協などからのお知らせや、緊急の場合の一斉放送などは、大勢の人が同時に用件を知ることができ、電話にない長所をそなえております。

そこで、役場に対して提案したいと思います。

それは、こんなに便利なものも、みんなが引いてはじめてその効能をフルに生かすことができるわけですから、全戸に有線を引くような計画を立てて頂き度いと思います。

経済的な理由で費用の負担の出来ない家庭には、公費による援助や、一度に支払できない家には、分割払の方法など、何とか考えれば、方法はありそうな気が致します。

こんな提案は無謀なものでしょうか。

（夢望者）

声のひろば